

第3回門真市魅力ある教育づくり審議会 各部会での意見（まとめ）

資料2

○つながりのある教育の創造部会での意見

- ・小中のギャップに関して、子どもの成長にはある程度のギャップが必要で、それを乗り越えていくことで子どもは成長していく。また一方で、あまり高いギャップでは乗り越えられない子どもがいるので、それは教育としてはよくないのでは。
- ・そのため、全ての子どもが乗り越えられる段差の低さ、段差を下げていくということが重要。
- ・小中のギャップは主に、小学校は学級担任制、中学校は教科担任制であるところにある。
- ・最近小学校でも教科担任制のようなものも導入されていて、中学校の教科担任制というプロフェッショナル性でのメリットだけではなく、複数の先生が子どもを見ることができている。一方、小学校の低学年ではひとりの担任の先生が、子どもの細かい表情も含めて丁寧に見ていくということも大切である。
- ・小学校の高学年でも、教科によっては合同で授業をしたり、少人数指導や複数の先生による指導等すでに中学校での教科担任制に類するような取組をしている。
- ・当面は1年生から4年生までは学級担任制にとどめておき、5年生以降については、いくつかの教科では教科担任制のようなものを試みることが大切。
- ・小学生が中学校に見学に行く機会や中学校の先生が小学校に教えに来ることなどで交流が進んでいる。子どもの勉強のためだけでなく、先生の側の勉強、研修にもなる。
- ・中学校区でめざす子ども像を共有しながら、9年間の子育てを小中の先生方が一緒になって考えているといった取組が進んでいる。
- ・義務教育施設一体型や併設型小中学校などが門真のどこかにひとつぐらいモデル校としてできて、どう子どもが育つのかと見てみることも興味深い。今後そのようなことも議論もできるなら考えていきたい。

第3回門真市魅力ある教育づくり審議会 各部会での意見（まとめ）

○子どもの学ぶ意欲向上部会での意見

- ・まなび舎 Kids は、ポイント制にしている学校があり、動機付けになっている。
- ・サタスタは、小・中学校が混ざり合っているので、年上の姿を見せられる場にもなっている。
- ・事業の目的である居場所づくりについてはよいが、自学自習ということを考えた場合、本当に来てほしい子が来ないという現状が課題。
- ・中学校では不登校気味の子どもの自学自習の場として、校内適用指導のようなことをしているが、加配の教員が少ない、余裕のない学校では回らない。自学自習をする子どもを見るスタッフ体制が必要。
- ・自学自習をすることで、やる子は伸びるがやらない子は伸びない。その格差がますます広がっていく。ボトムアップをどのように図っていくのが課題。
- ・学習規律とか動機付けなどは事業に関わっているスタッフだけではなかなか難しいので、学校との連携が必要。
- ・小学校の中学年程度のところで、きちんと学びのハードルをクリアできる体制が必要。
- ・図書室の活用について、勉強は嫌いけども本は好きという生徒もいるので図書室の解放があった方がよい。
- ・体験授業等、楽しいと思わせる仕掛けを授業、授業外の場の中でやっていくことが必要。
- ・なぜ勉強する必要があるのかというキャリアデザインが大切。